

# かざぐるま通信

発行：社会福祉法人いこま福祉会 発行責任者：理事長 浅井 伊知人

## 新年の挨拶

2024年、新たな年を迎えました。年末も予報通り例年に比べて過ごしやすく、元旦も穏やかな過ごしやすい日になっておりました。しかし、能登半島では甚大な災害が起きました。お亡くなりになられた方に謹んでお悔やみ申し上げます。また極寒の中、被災された方々に心よりお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復興をお祈りしております。

今年の10月に第6回地域共生社会推進全国サミットが生駒市で開催されます。このサミットは、それまでの「介護保険推進全国サミット」から「地域共生社会」へと2018年（平成30年）にバージョンアップされて、全国から地域福祉やまちづくりを担う、福祉・医療・行政関係者や企業、市民などの関係者が集まり、地域共生社会への理解を深め、その実現に向けた取組等を考えるイベントです。

生駒市は、このサミットの運営を実行委員会形式で実施。行政も含め、市内を中心とした40団体の代表者が集まり、サミットに向けて定期的に会議を開いています。いこま福祉会も実行委員として参画させて頂いています。

近年、「格差社会」「無縁社会」や「ヤングケアラー」等様々な社会問題を現わす言葉が生まれ、更に急速な人口減少によって福祉サービス等の公的支援を安定的・継続的に提供することが困難な地域も出始め、日本社会全体が右肩下がりの様相を示しています。そうした社会状況を背景に「地域共生社会」の実現の推進が目標として掲げられることとなりました。

地域共生社会とは、制度・分野ごとの「縦割り」や「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えてつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会とあります。

私が20歳になったばかりの頃、学園で脳性麻痺の子どもたちと共に生活をしていた当時、障がい児の義務教育化がまだ進んでいませんでした。健常児との交流を図りたいと近隣の小学校に伺い、校長先生と直接お話をしてプールを開放して健常児と一緒に泳げるようにと頼み込んだこと。そして、後から理事長に呼び出され「お前は、わしが小学校の校医をしていることを知らんのか。まずこっちに話を通さんか」

「プールで泳ぐのにもきちっと心電図をとらんといかんのだろ」と大目玉を食らいました。そして、近隣の高校にお願いをして、高校の文化祭で時間をもらって影絵劇の発表をさせてもらったこと。発表が近づく

中、子ども達は張り切って夜中遅くまで劇の練習をしていました。また、近くの公園で子ども達を遊ばせていても健常児の動くスピードが速く一緒に遊ぶということができませんでした。そこで職員間で話をし紙芝居をして健常児と一緒に過ごす時間をつくったりしたこと。あの頃、障害を持つ子ども達が地域社会の中で年齢に応じた普通の暮らしをできるように、子ども達の素晴らしさをもっと知ってもらえるように必死で動いていたことを今でも思い出します。あの頃から、いやもっともっと以前から福祉に携わってきた人たちは、切なる思いを持って共生社会を目指して頑張ってきたのです。

話は変わりますが、毎年行う新人職員の研修会で、二つのエピソード（30年前に読んだ本からの引用）を紹介して、伝えているメッセージがあります。

一つ目のエピソード。これは新聞に投稿された実際にあったお話です。

小学校低学年の子どもが、友だちに格好いい自転車をみせつけられて、自分も新しい自転車が欲しいとお母さんにおねだりをします。欲しがるとはわかってはいるのですが、まだ持っている自転車は乗れるし、物を大切にしなければならぬことを教えたいとお母さんは考え、子どもに駄目だと伝えます。しかし子どもは引き下がりません。それでもお母さんは「買わない」と突っぱねます。散々交渉した挙句、埒が明かなく考えたその子は、結局お父さんにおねだりをして自転車を買ってもらうというお話です。

二つ目は、ある小説の一節で、昔の貧しい農村での情景が映し出されています。その村では子どもたちの間でヨウヨウ遊びが流行り、皆それで遊んでいるのですが、ある男の子だけがそれを持っていません。両親は農作業に追われており、普段はその男の子も下の妹の世話をし家事を手伝っています。遊ぶ時間ができるたびに皆のところにハサツ〜と走って行くのですが、その子はヨウヨウを持っていないので他の子と同じように遊べません。そこで家に帰ってお母さんに「ヨウヨウを買ってほしい」とおねだりをします。お母さんも他の子ども達がそれで遊んでいるのを知っているのだから買ってあげたいのですが、貧しい家庭の状況から悩んだ末に、買ってあげるとは言えませんでした。その子も駄目だとわかるとそれ以上おねだりすることなくすぐに諦めて、どこかに遊びにいってしまいます。そして数日後、その子は木の皮を捲って自分でヨウヨウを作り、家で興じてみせる。そのような一節です。

子どものおねだりはいつの世も同じです。この両者の結果の違いはどこから来るのか？

豊かさが良いとか悪いとかを問いたいわけではありません。ただ後者のお話の場合、貧しさという「苦」を共にするなかで、親子が同じ生活の土俵にいる。同じ土俵にいて、言葉が駆け引きの道具としてではなく、共感や理解を生むことにつながっているのではないか。

私たちの仕事を考えた場合、例えばグループホームは、利用者の人にとって大切な「暮らしの場」です。そこに「働く場」としてのみ私たちが存在するのであれば、そこに本当に共感がうまれるのか？





福祉の仕事に従事する人たちは、多かれ少なかれ共感や共生という言葉や考え方に惹かれます。夢を抱いて入職される人たちに水を差すことになるのかもしれませんが、敢えて必ずこの問いを投げかけます。そして、簡単に実現できることではないんだけど、それでも共感や共生を目的に一緒にこの仕事を頑張っていこうと伝えるようにしています。

数年前、暗峠に向かう茶屋である利用者のお父さんと出会いました。毎朝その茶屋まで歩いて来てコーヒーを飲むのが日課のようで、「今日は早く来すぎて、店主がまだいないわ」と誰もいないお店の中から笑って出て来られました。その数か月後、体調を崩されたお父さんとご自宅で最後に交わした言葉が、「子どもをお願いします」という一言でした。それから間もなくお父さんは入院され、お亡くなりになりました。その茶屋の前を通る度に必ずお父さんとの会話を思い出します。そして昨年、その利用者さんも私たちのホームで息を引き取られました。最後まで職員は懸命にその方の支援をしてくれました。

「自然との共生」「生き物との共生」等、共生という言葉はもしかするとその時代の社会的背景や問題を投影し、こうあってほしいという「願い」を映し出しているのかもしれませんが、もしそうであるならば、我が子を心配しこの世を去っていった親御さん、そしてこれまで障がい児・者を懸命に支え志し半ばで倒れていった福祉の先人たち、死者（過去）との「共生」をも私たちは忘れてはなりません。その願いや想いを私たちは受け継いでいかなければなりません。

どんなに苦しい時代にも、弱い人たちを見捨てず社会の中で共に生きることを目指してきた社会福祉法人。そしてそこで携わる人たちは、言葉ではうまく表現できない利用者の想いや悲しさを懸命に汲みとり、時に自身も傷つきながらも他者への理解を深めようと努力してきました。世間との感覚にずれが生じることもあるかもしれませんが、しかし私はいつもそういった人たちをリスペクトしています。

これまで誰よりもどこよりも共生社会の実現を強く願い、そのパイオニアとして走り続けてきた社会福祉法人が、その敷居が高いと言われることがないように、新たな共生社会の実現に向けて更に努力して参ります。今後ともご指導、ご支援下さいますよう宜しくお願い致します。

理事長 浅井 伊知人



## 第9回いこいこまつりを開催しました！

大谷 健太郎

今年のいこいこまつりは、久しぶりに地域の方々も参加していただく形で開催しました！

新型コロナウイルスが5類に移行したとはいえ、まだ不安も残る中でどのような開催方法で行うかを実行委員会や準備委員会で話し合ってきました。やはり、「集って笑ってつながって」のテーマどおり地域の方々が参加するまつりに戻していきたいという思いがあり、今回は屋外のみで、3年前よりは規模を縮小しての開催になりました。

当日は天候に恵まれ、予想を超えるたくさんの方々にご来場いただきました。

ステージでは、生駒高校コーラス部のファンファーレから始まり、地域の保育園・幼稚園の園児の皆さんやかざぐるまメンバー、生駒市消防職員ボランティアダンスチームの皆さんがステージを盛り上げてくれました。たけまるくんも登場し、子どもたちも大喜びでした！



模擬店は福祉事業所やふうしゃの会を中心に、おいしい食事や飲み物を販売していただきました！屋外飲食スペースも設置し、皆さんおいしそうに召し上がっていたのが印象的でした。かざぐるまのメンバーも金券をもって楽しそうに模擬店を回っていました。

ワークショップはスライムづくりやストラックアウト、ビーズづくりなど、地域の皆さんやかざぐるまメンバーが盛り上げてくださいました。こちらも行列が出来るほどの大盛況でした！

来年も、皆さんに楽しんでいただけるよう企画・準備にメンバー、職員一同取り組んでいきますので、どうぞ楽しみにしててください！



### 編集メモ

左列掲載の写真は、かざぐるま敷地内に設置されたステージでの催しの一場面です。そのステージを彩る大きな幕は、かざぐるまの「笑風」班を中心としたメンバーと職員によって製作されました。クラッカーから飛び出した紙吹雪を、手に赤や黄、青などのペンキをつけペタペタと描いて手形で表しています。

ステージ終了後、この紙吹雪（手形）に手を重ねてスマートフォンで写真撮影する学生さんたちがいて、思いがけず“インスタ映え”スポット！？になっていました！



## 介護研修に参加して

中辻 勇

メンバーの高齢化に伴い、身体的な介助が必要な方が増えてきていることから、株式会社はいせつ総合研究所が開設している「むつき庵」副所長の熊井先生に来所していただき、排泄に関することや介護技術、福祉用具の活用などに関する勉強会を実施しました。

勉強会では関係職員が参加して、熊井先生にスタッフの介助の様子を見ていただきました。相手に対して安心感を得てもらうための声かけの大切さやお互いの身体の負担を軽減できるような体の動かし方などを教えていただきました。



また、介助については“順序を覚えるのではなく相手の状態や状況に合わせて実施すること”、“介助する相手はモノではなくて意思のある人であること”、“相手の言動（これまで生活されてきた背景や暮らし全体を考えることが大切）には意味があることを念頭に、相手からの発信を見逃さないようにすること”などが大切であることを学びました。

福祉用具については身体状況に合わせて使用することが大切で走行用リフトやスライディングボードなど様々な福祉用具の活用方法を教えていただきました。

今後も勉強会を通して教えていただいたことをメンバーとの関わりの中でしっかり活かしていきたいと思います。

## 地域公益・街づくりプロジェクト 竹のワークショップ

阿曾 麻里生

令和5年11月25日、第二弾となる「たけのみりよくはっけん！たけあそびワークショップ」をいこま里山クラブさんと共同で開催し、初回に続き今回も定員を超えるたくさんの方にご応募をいただきました。

今回は竹林整備を体験し、その大切さを学んでいただくということで、整備された竹林と鬱蒼と茂る竹やぶを見比べて整備された竹林の気持ちよさに触れるとともに、実際に竹林に入って青く育った大きな竹をのこぎりで切り倒す大変さも経験しました。一汗かいたあとは、竹のマイカップで食べるメンマ入りの絶品豚汁におかわりの列ができるなど大好評でした。

午後からは竹を使ったプランターとミニ門松づくりを行い、竹は横に切ると硬いのに縦に切るとぱかっと簡単に割ける面白い性質にも皆さん興味津々でした。子どもたちが自然の中で楽しむ姿、真剣に向き合う姿を見て、いこま里山クラブさんとともに確かな手ごたえを感じたイベントとなりました。





## さつま芋ほり体験

大谷 健太郎

例年行ってきましたさつまいも掘り体験を今年も開催しました。近畿大学ものづくり村の農園でやまびこネットワークを通じて地域のこども会の子どもたちの参加を募り、5月にさつまいもの苗を植え、10月にその植えたさつまいもを掘り、さつまいもの成長やできた喜びを体験してもらう企画です。

今年もたくさんの子どもたちが参加してくださり、さつまいもを夢中になって掘り起こして収穫しました。お母さんやスタッフと一緒にがんばって掘っている子もいれば、お兄ちゃんお姉ちゃんの学年の子どもたちはどれだけ掘れるか競いあったりそれぞれの楽しみ方で土と触れ合い、楽しんでいました。協力していただいた農業法人ゲミューゼも全体の進行と、子どもたちに喜んでもらえるようさつまいもにまつわるクイズや豆知識などの話をしてくれて、充実した時間を過ごすことができました。

また、5月に自宅からもってきてもらった生ごみが10月には土に交じり堆肥になる「生ごみ実験！」も大好評で、子どもたちからも「こんな風になるんだ！」と驚きの声があがっていました。

子どもたちから元気な喜びの声をいただき、こちらもやりがいに満ちた瞬間でした。最後は焼き芋をみなさんと召し上がってもらい、お土産のさつまいももたくさん持って帰っていただきました。

地域の子どもたちが土と触れ合い、作物の成長を学びにし喜びあう大切な企画です。次年度以降も継続して行っていきたいと思います！



## 街づくりプロジェクト

面松 大介

令和5年12月3日に人と人をつなげるイベントを『NPO法人市民活動サークルえん』の協力のもと開催しました。このイベントは体験をきっかけにその人にとっての生きがいや将来したいことなど、今の環境から一歩前に進みたいと考えている人たちのきっかけになればという思いから、入社1～2年目の職員が中心になってイベント企画を行いました。

当日は、『風のファーム』でじゃがいもやニンジン収穫を行ったり、収穫した野菜を使ったカレー作りやじゃがバターを作ってみんなで食べました。その後は、ラグビーの体験や染物体験などを行いました。放課後等デイサービスを利用されている小学6年生から高校2年生までの15名の方が参加され、様々な体験をしていただきました。

特にラグビー体験では、初めて触るラグビーボール、投げ方から教えてもらいました。まっすぐ投げられるようになると、ミニゲームも行い、ルールも少しずつ覚えながら白熱したゲームを行っていました。参加した皆さんからも「今日は参加できてとても楽しかったです」と嬉しい言葉をいただきました。今回の体験が何かのきっかけになればと思います。





## 日中部門から

大谷 健太郎  
中辻 勇

日中活動部門では、日々メンバーが働くことに携わり、それぞれの持っている力を発揮して活動に取り組んでいます。

その中で、今年はコロナも5類に移行し、様々なイベントや出店、地域との交流など、地域の皆様と触れ合う機会がたくさん増えた1年でした。

11月には壱分小学校の子どもたちとの交流会で、かざぐるまのメンバーが普段取り組んでいるお仕事を紹介する機会をもたせていただきました。実際にメンバーが作ったさをり織りの製品やクッキー、軽作業などを子どもたちの手で触れてもらい、制作している工程などもメンバーから紹介してもらいました。「すごいね!」と子どもたちからの大きな反応をいただき、その翌日には交流会に参加してくれた子どもが放課後にかざぐるまに来て「おかあさんにプレゼントする!」とクッキーやさをりの商品を買いにきてくれることができました。

農業では、森田記念福祉財団よりひとり親世帯などの困っているご家庭に直接届けたいという思いで始められた野菜デリという取り組みに参画させてもらい、ひよりやかざぐるま、きこりなどの農作物、野菜から作った加工品やクッキーを納品させていただきました。実際に受け取ったご家庭からは、「こんなにたくさんの野菜をもらってとてもありがたかった、おいしかったです!」など喜びのメッセージをいただくことができました。

このように、メンバーや職員が一生懸命作った製品がこうして地域の方々にも喜んでいただいたこと、そしてたくさんのメッセージを返してもらえたことが何よりのやりがいになっています。交流や地域との関わりが再開してきたことでこんな喜びをいただく機会が増えて嬉しい限りです。

これからも、地域との繋がりをさらに広げていく一年にしたいと思います。令和6年もどうぞよろしくお願いいたします。



## 居住部門から

伊藤 貴訓

本年もよろしくお祝い申し上げます。

今年で7年目となりますが、関谷前理事長をはじめとしたボランティアの方々が、元旦に帰省されないホームメンバーを対象に豪華なおせち料理やお雑煮、お善哉等を作ってくださいました。毎年、年末から準備に取り掛かり、お料理に影響があるため暖房も入れず寒いなか調理してくださいます。とても気持ちのこもったお料理をメンバーも喜んでいただき、お陰で暖かい新年を迎えることが出来ました。年末になると「またある?」と楽しみにしている方もいらっしゃいます。職員だけでは出来ないことで感謝しております。

昨年はホームでメンバーを看取りました。介助技術・看取りについての研修等にも参加し、まだまだ支援体制や環境面等十分ではないなか、ご本人がどう思われているのか等検討する機会が多くありました。高齢化が進んでいる状況で、将来についてご家族からの相談も増え、より切実なものになっています。現在の支援も振り返りながら、ご本人の想いをくみ取ることが出来るよう日々関わっていかねばと思います。

昨年11月以降ミャンマーの方々が特定技能・アルバイトとして働いております。慣れない環境・慣れない仕事の中ではありますが、前向きに頑張ってくれていますので、見かけた際は是非、声をかけていただければと思います。



### 編集メモ

おせち料理について、コロナウイルスがまだまだ落ち着いた状況のため、感染対策として一人ひとりお重にし、メンバー・職員合わせて約40食ものお重入りおせち料理を作ってくださいました!



## 地域生活部門から

高曲 友理子

“生活支援センターかざぐるま”では、『生活力を高めるプログラム』と題して、BBQイベントを実施しています。ただBBQを楽しむだけではなく、前回（10月開催）は参加者自身の就労体験や失敗談、仕事をする中で工夫していること等をお互いに話す“しゃべり場”企画も同時に行いました。長い期間、コロナ禍の影響でイベント自体を中止しており、昨年はやっとみんなで顔を合わせお話ができるようになり、充実感でいっぱいの機会となりました。また、毎週土曜日には“サロン”として支援センターの一部を開放しているほか、コミュニケーションに関する勉強会（“スキルアップセミナー”）も定期的で開催し、他者とのコミュニケーションの中でのつまづきや難しさを共有して、対策や攻略法を一緒に考える時間を作っています。支援センターが、気軽に集い、リラックスして過ごせる場所になればいいなあと思っています。

最近では、知的障害のある方々からの相談だけでなく、精神疾患のある方や診断のない学齢期のお子さん（ご家族）からのご相談も増えています。できるだけお断りはせず、お一人お一人のお困りごとに伴走していくつもりですが、ここ数か月は少しお待ちいただいたり、場合によっては他の事業所さんをご紹介するケースも出てきています。地域の中で、同じ志を持ち、協力し合える仲間がたくさんいることを心強く思うとともに、チームプレーで障害のある方々の暮らしをサポートしていけたら、と思います。

いこま福祉会のメンバー、ご家族にとって、元気で楽しい一年になりますように…。また、能登半島地震で今も不安な想いをされている方々が、少しでも早く安心して笑顔で生活できるよう、心から願います。

本年も、どうぞよろしくお願いいたします。



SST勉強会の様子



「しゃべり場テーマ」



「しゃべり場」の様子

## 関谷前理事長が令和5年度奈良県障害者更生援護功労者知事表彰を受賞されました

障害者の更生援護に尽力のあった方々のうち、その功績が特に顕著であると認められる方が受賞され、令和5年12月19日に奈良県人権センターにて表彰式が執り行われました。

社会福祉法人いこま福祉会で法人設立以前の作業所時代から、障害者支援にご尽力されてきました、関谷多摩恵前理事長の受賞に心よりお祝い申し上げます。

